

## 論 文

# 谷口ジローの“散歩もの”漫画をめぐる考察 —フィロバティズム (M, Balint.) の視点から—

二木 文明<sup>※1</sup>・角田 美穂<sup>※2</sup>

**要旨:**谷口ジローには“散歩もの”とでも呼びうる漫画がある。たとえば、『歩く人』や『散歩もの』、『ふらり』、『ヴェネツィア』などがそれであり、さらには自然を扱った漫画もこれに含まれるだろう。

それら散歩もの漫画の主人公たちは、Balint,M. (マイクル・バリント) のいう「フィロバティズム」(散歩などによる、人間不在の広がりへの一体化と充足の志向)の心性を有しているのではないかと考えられるが、作者の谷口自身も同じ心性を持っていたと推測される。

しかし、フィロバティズムだけでは人間関係や社会に適応できないため、フィロバット(フィロバティズム的心性の持ち主)は対象や物に対する拘泥という仕方で人生を乗り切っていこうとする。

谷口も漫画家となり、当初は細密さと静止性(拘泥の表れ)を特徴とした作品を描き続けていたが、東京郊外への転居をきっかけとして、自らの心の奥に潜む広がりへの志向(フィロバティズム)に気づき、散歩もの漫画を手掛けるようになったことは十分に考えられる。

**キーワード:**谷口ジロー、散歩もの漫画、フィロバティズム、拘泥、マイクル・バリント

## はじめに

谷口ジローは『「坊ちゃん」の時代』や『シートン』、『孤独のグルメ』などで知られる漫画家である。

一方で、谷口には“散歩もの”とでも呼びうる漫画があり、たとえば『歩く人』や『散歩もの』、『ふらり』などがそうである。それらの漫画は我々に癒しのようなものを与えてくれると思われるのだが、一体それが何に由来するのかわ、散歩や移動、風景、ひいてはフィロバティ

ズムといった視点から分析することを目的として考察した。

## I. 方法

本論考は病跡学的研究である。病跡学(Pathographie)とは、天才や傑出人の精神の病ないしその病的傾向と創造性(文学、芸術など)の関係、また、生活史的展開を明らかにする生活記録・伝記や研究を指し、精神医学—とりわけ精神病理学の応用分野のひとつである。

※1 東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科

※2 明理会 西仙台病院

広い意味での事例研究に属するといえるだろう。

## Ⅱ. 結果

### 1. 生活史・職歴

谷口ジロー（本名・谷口治郎）は1947年、鳥取県に生まれた。父親は洋服の仕立て職人で、ジローは3人兄弟の三男だった。家庭はあまり裕福ではなかったという。谷口は病弱な子どもだったので、本を読んだり絵を描いたりして過ごすことが多かった。自伝的漫画に小学生の頃の両親の離婚と父親の再婚が描かれているが、実際のところは不明である。

鳥取商業高校を卒業した後、いったん京都の繊維会社に就職したが、漫画家を目指して1966年（19歳）上京した。石川球太や上村一夫のアシスタントを経て独立、以後、ハードボイルドや冒険、格闘、SF、アクションものなど様々な作品を描いていたが、1990年になって「歩く人」（1992年『歩くひと』単行本）の連載を始め、新境地を開いた。

その後、散歩をテーマとした作品としては『散歩もの』や『ふらり』、『ヴェネツィア』などが、散歩でなくとも移動や風景が関わっている作品としては『犬を飼う』や『孤独のグルメ』、『神々の山嶺』、『シートン』、『千年の翼 百年の夢』などが挙げられる。

谷口の漫画は日本漫画家協会賞優秀賞や手塚治虫文化賞漫画大賞、文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞など多くの賞を受けた。また、2011年には仏芸術文化勲章「シュバリエ」を受章したり、『遥かな町へ』がフランスで映画化されたりするなど海外でも高く評価されている。

今後も一層の創作活動が期待されていたが、2017年2月11日、69歳で多臓器不全のため死去した。

### 2. 谷口の漫画について

谷口は1971年の「唄れた部屋」（「ヤングコミック」掲載）でデビューし、その後、原作者・関川夏夫との共作で「無防備都市」や「事件屋

稼業」などを漫画雑誌に連載した。この時期の作品はハードボイルドやSF、アクションものであり、一枚一枚の絵を丹念に描き込むという点を除けば、谷口を他の漫画家たちから際立たせる特徴をそれらの内に見出すことはできない。

1987年、関川との共作『「坊ちゃん」の時代』を「WEEKLY 漫画アクション」に1996年まで連載した。この作品が転機となり、それまでの劇画調のタッチから、静謐さと端正さをスタイルとする絵へと変貌を遂げた。

1990年、「歩くひと」を「モーニング パーティ増刊」に連載、以降“散歩もの”漫画が次々と描かれた。それらの何枚かを図として示したい<sup>注1</sup>。



図1. 『歩く人』<sup>7)</sup>

図1は『歩く人』<sup>7)</sup>から。台詞がほとんど存在せず、またストーリーらしきものもなく、谷口と思しき主人公は東京近郊—おそらく彼が住んでいた東村山市—の風景の中をひたすら歩く。



図2. 『ふらり』<sup>10)</sup>

図2は『ふらり』<sup>10)</sup>から。主人公は測量を仕事とする武士で、歩幅で距離を測る訓練をするために江戸の町を歩き回る。しかし、彼は距離の測定よりも、歩くこと自体に楽しみを感じているようでもある。



図3.『ヴェネツィア』<sup>11)</sup>

図3は『ヴェネツィア』<sup>11)</sup>から。この作品は、ルイ・ヴィトン社から依頼され、トラベルブックの一冊として出版された。主人公は母の面影を探してヴェネツィアの街をめぐり歩くのだが、作者はストーリーよりも風景描写のほうに比重を置いているようにもみえる。



図4.『散歩もの』<sup>12)</sup>

図4はタイトルが『散歩もの』<sup>12)</sup>というそのものズバリの作品である。これは「通販生活」誌に2年間にわたって連載されたのだが、編集部から散歩の漫画を描いてほしいという依頼があったのがきっかけである。主人公は北品川や目白、吉祥寺、井の頭公園など都内の街中を歩き回る。『歩く人』よりは台詞が多いが、ほぼモノローグ(独白)である。なお、原作者は久住昌之だが、この漫画のあとがき<sup>13)</sup>を読むと、彼自身も散歩に強い関心を抱いていることがわかる。

また、散歩や歩くことが直接的な主題となっていないが、移動や風景が何らかの形で関与している作品も1990年以降少なくない。たとえ

ば『孤独のグルメ』<sup>14)</sup>は“食”をテーマとした作品のように喧伝されており、それは確かに当たっているだろう。しかし、それだけではなく、いやそれ以上に、移動がテーマとなっているのではないか。すなわち、主人公は色々な食堂で味を楽しんではいるが、同時に、一つの店から別の店への空間的な移動に対する嗜好も持っているように思われる。

『シートン』<sup>15)</sup>は今泉吉晴の原案をもとに、画家・動物作家として有名なシートンを主人公とした漫画である。自然の中で生活しながらナチュラルリストー野生動物と共に生き、その生態や自然を研究する人ーとして成長していくシートンの姿が描かれている。とりわけ、谷や森、沼沢地を散策したり、夕日で黄金色に輝く針葉樹の山々を越え歩いたりする姿は“散歩もの”漫画の主人公たちと重なってみえる。

『神々の山嶺』<sup>16)</sup>は、エヴェレスト登頂に賭ける男たちを描いた長編小説<sup>23)</sup>の漫画化である。この漫画を、登山という行為に“征服欲”や“競争心(一番乗り)”などの男根期心性を見ようとする原作者・夢枕獏の創作意図と、登山というものに“風景の中の移動”を見ようとする作画者・谷口ジローの創作意図が“山に登ること”という一点で合致したところに生まれた幸福な作品と評するのは図式的で強引に過ぎるだろうか。

### 3. “散歩もの”漫画の特徴

谷口は、“散歩もの”漫画を描くようになったいきさつを次のように語っている。

「・生活がかかっていることもあり、自分の好きな物語ばかりを描いているわけにもいかず、依頼があればどのような内容のものでも引き受けてきたけれど元来、絵を描くことが好きだったので、まるで楽しめなかったわけではない。それに希にはあるが、私に自由に描かせてくれる編集者もいた。そんな時、私は溜めていたものがはじけるように自然や動物をテーマとした物語を描いた。犬の話、マタギの話、アフリカ象の話など・」と記し<sup>8)</sup>、また、「この時期(80年代後半)、私はヨーロッパのB・D(bande dessinée: ストーリー漫画、漫画絵の意)



の世界観やその造形に大きな刺激を受け、模索を繰り返しながらなんとか、自分の漫画表現法を見つけ出そうと、もがきつづけていたことが思い出されます」とも述べている<sup>18)</sup>。

その後、東京の近郊へ引っ越し、犬を飼うようになり、犬を連れて散歩する日々が始まった。谷口によれば、「私の作品『歩く人』はそんな、なにげない散歩の日々を描いたものである。毎日サスケと歩くことで今まで気にもかけず見過ごしてきた小さな自然を知る。妻との対話も増える。たった一匹の犬が私たちのかたわらにすることで、こんなにも心が満たされるとは思ってもみなかったことだった。…」<sup>8)</sup>。

そして、「なによりもキャラクター主義の漫画の氾濫するなかで、このような風景描写をメインとした静かな作品も読者に受け入れられる時代になったことが、大きな喜びでした。それでも気分だけが先走り、物語表現としては不十分であるとの批判を受けましたが、私の漫画表現に新しい“小径”<sup>こみち</sup>をつけてくれた、思い入れ深い作品となったのです」と述べ<sup>9)</sup>、自らの漫画人生における『歩く人』の占める意義を強調している。

さらに、散歩の意図に関して谷口は、「散歩はあくまで自由であること、目的もなく時間にも束縛されないという条件も付け加えられるでしょう。…何も求めず散歩に出かけてみると、どういう訳かその瞬間から、ゆっくりと時間が流れ始めます。おのずと気持ちが豊かになり、忘れてしまった懐かしいものを見つけたり、雲の流れに心地良さを感じられたりもするでしょう。…実は表題作『歩く人』の主人公のモデルは私です。…たまに途中下車して寄り道することもあります。その時は何も考えないようにして歩きます。仕事のことやわずらわしさも忘れるようにしています。そのような、時間の隙間<sup>すきま</sup>を歩くことは私にとって精神が解放され、リラックスできる唯一の貴重な時間となります」と語っている<sup>9)</sup>。

“散歩もの”の主人公たちは、風景の中を移動している。それも、単独での移動であり、ときに他者と関わることがあってもあっさりしていて、真の意味での対人的交流はない。とはいえ、彼は決して孤独ではない。風景の中で単独

であることを楽しんでいる。

もう少し踏み込んでいうならば、主人公たちの散歩（移動）は、彼らが風景の中の対象の性質や意味・役割に注意を向けつつ歩いているというよりも、対象の手前に広がる空間に視線を委ね、その広がりによって一体化し充足しているようにみえる。

この意味で、“散歩もの”漫画の主人公たちは Balint, M. (マイクル・バリント) のいう「フィロバティズム」心性を体現した人物たちと見なすこともできる。そして、「実は表題作『歩く人』の主人公のモデルは私です」という言葉が谷口の本心を表しているならば、彼自身もまた、フィロバティズム心性の持ち主ではなかったかと考えられる。

### Ⅲ. 考察

#### 1. フィロバティズムについて

最初に、フィロバティズムについてその概略を説明しておきたい。

精神分析家の Balint は、前エディプス的水準を基底欠損水準 (level of the basic fault) と呼び、この水準は単純で原始的であり、そこで生起する出来事はすべて二者関係<sup>注2)</sup>であるとした。そして、この二者関係には二つの類型があり、それらをオクノフィリア的關係とフィロバティズム的關係と呼んだ<sup>1)</sup>。

オクノフィリア的關係においては対象<sup>注3)</sup>の存在が絶対の条件で、対象はそれなしでは生きていけないほど大切な支えである。オクノフィリア的人間 (Balint は「オクノフィル」と呼んでいる) の人生は対象から対象へと渡り歩く人生であって、渡る途中の空っぽな空間は恐ろしい存在なのだという。

一方、フィロバティズム的關係にあっては、対象<sup>注3)</sup>は冷淡なもの、信頼のおけない危険性を秘めたものであり、こうした対象を避けて、空っぽの広がり—山や砂漠、海洋、大気など—と調和しようとする。フィロバティズム的人間 (「フィロバット」と呼ぶ) にあっては、対象を欠いた広がりには安全友好的なものとして体験される。

Balintによれば、フィロバティズムとは、出生以前の自己と環境との調和的な“渾然一体化”を取り戻そうとする試みの在り方である。ちなみに“渾然一体化”に関して、彼は「母親に抱かれている安全な嬰兒になぞらえられるものであり、さらに、母親の子宮の羊水に包まれていた時という、われわれの固体発生における過去、ひいては、個体発生は系統発生を繰り返すという説を援用すれば、われわれの系統発生における祖先の生物が海に安全に包まれているところになぞらえてよいのではないだろうか」というふうに説明を加えている<sup>4)</sup>。この表現から考えるに、広がりや出生以前の環境と“調和”したり“渾然一体化”したりするとは、主体がそこに充足することに他ならないだろう。

さらにBalintは、フィロバットにあっては、空っぽの広がりやと調和してその中での移動の自由を確保するためのスキル(技術)を身に付け、発達させるという。たとえば、飛行や航海、ブランコ遊び、そして散歩などがそれである。

## 2. 擬似(仮性)オクノフィリア

フィロバティズムがこのような意味であるならば、とりわけ1990年以降、“散歩もの”漫画を描きつづけた谷口ジローも、同様にフィロバティズム心性の持ち主、すなわちフィロバットだったのかもしれない。

但し、ここで一つの疑問が出てくる。というのも、フィロバットとは主体の対象関係が未分化で、前エディプス的な二者関係の特徴とする基底欠損水準にあり、かつ、二者関係の相手が人間ではなく空っぽの広がりである以上、仮に彼がその状態のまま成長し、人間関係や社会の中に参入していくならば、病的な精神状態を呈する可能性も否定できないからである。

Balintはフィロバティズムに関連した病理として孤立的退却性(self-contained detachment)や種々の類妄想的態度(paranoid attitudes)、depressionなどを挙げている<sup>3)</sup>。しかし、彼の言うスキル(広がりやと調和してその中での移動の自由を確保するための技術)だけで、これらの病的な状態に陥るのを防ぐことはできないだろう。なぜなら、乳幼児期から児童・思春期を

経て大人へと成長していくためには、必然的に対象と関わらざるを得ず、フィロバティズム的なスキルだけではそうした成長の各段階で直面する発達課題に対処できず、結局、他者や社会を排除した自閉や幻覚妄想などの精神病状態へと追い込まれてしまうと推測されるからである。

とはいえ、フィロバティズム心性の持ち主が成長する過程で皆が皆、精神病状態に陥るとは考えにくい。少なからぬフィロバットは何らかの方法で、この難局を切り抜けて成長するのではないだろう。

Balintはこの点について言及していないのだが、筆者は次のように考えている。

『治療論からみた退行』の中でBalintは「エディプス複合(コンプレックス)がオクノフィリアを土台として形成される」と述べているが<sup>2)</sup>、この言葉は、精神分析学的な発達がオクノフィリアを基礎にして進んでいくと解釈してもよいだろう<sup>註4)</sup>。しかし筆者は、フィロバットも精神分析学的な発達を一定型から外れた仕方ではあるが一辿る場合があるのではないかと考え、これを“擬似(仮性)オクノフィリア”と名づけてみた。

もちろん、擬似的であるから、普通の仕方での精神分析学的発達を辿ることはない。この“擬似オクノフィリア”を身に付けたフィロバットは、口唇期からエディプス期を経て成人期に達するまでの発達段階を飄々と、すなわち、葛藤や軋轢を可能な限り生じさせないやり方で淡々と通過していくのでないだろうか。養育者の嫉に対して抵抗せず、うわべだけ合わせるようにして乗り切っていくと言ってよいのかもしれない。

ただ、うわべだけの合わせ方とは役割にステレオタイプに同一化することにつながり、彼が対人関係の微妙さを理解するのは難しい。そのため、他者の心を忖度しすぎたり、逆に言外の意味を読み取れなかったりして、結果、人間関係に失敗してしまうことがあるかもしれない。

いずれにしろ、成長していく過程で、ある段階からフィロバットはフィロバティズムへの志向の大部分を一時的に棚上げせざるを得なくなるだろう。すなわち、広がりではなく、対象



に一定型から外れた仕方ではあるが一関わっていくことへと追い込まれる。

しかし、フィロバットの内奥には、広がりへの一体化とそこへの充足の希求が根強く存在していると考えられるので、その一体化と充足を、たとえば、もの<sup>注5</sup>への拘泥などの仕方では代償的に獲得しようとする機制が働くことがあるかもしれない。というのも、拘泥とは一ヶ所（一つの状態）に留まろうとする試みであり、広がりへの一体化と充足の欲求を代償的に満たしてくれる作業とも考えられるからである。

とはいえ、“擬似オクノフィリア”はあくまで借り物の衣装に過ぎず、彼はやがて何らかの出来事をきっかけとして、自身の内奥に潜む本来の心性、すなわちフィロバティズムへの志向に目覚めるだろう。ある日、たとえば山の上から遠くの景色を眺めている時、彼は広がりとは一体化し、そこに充足している自分を発見するということになる。

### 3. 谷口ジローとフィロバティズム

以上のことを谷口ジローに即して考えてみるならば、どうだろうか。

谷口の生育史について詳細は明らかになっていないが、自伝的漫画やエッセイ、知人たちの書き記したものからみる限り、幼少期から69歳で死去するまでの間、精神的な病を患った気配は窺われない。しかし、病的な傾向ということであればどうだろうか。気になるのは、谷口の漫画に初期の頃から一貫して認められる描画の“細密さ”と“静止性”である。



図5.『東京幻視行』<sup>17)</sup>



図6.『東京幻視行』<sup>17)</sup>

たとえば、図5および図6の『東京幻視行』<sup>17)</sup>。1980年代に描かれたアクションものの短編集だが、絵が非常に細密である。



図7.『海浜酒店』<sup>19)</sup>

また、図7の『海浜酒店』<sup>19)</sup>。これも80年代半ばのアクションものだが、描写が緻密で、動作もストップモーションがかかっているような印象を受ける。

筆者が思うに、この細密さと静止性は前節で述べた拘泥が表に現れた姿ではないだろうか。言い換えるならば、谷口の心の内奥には、後の“散歩もの”漫画にみられるようなフィロバティズムへの志向が本来的に潜んでいたのだが、人間関係や世の中を渡っていくためのスキルとして、成長する過程で“擬似オクノフィリア”を身に付けていった可能性が考えられる。

まず、“細密さ”に関してだが、谷口へのインタビュー記事によれば「カラーページについてはアシスタントに背景画や下塗りを任せるものの、仕上げはすべて自身が行う。そのため1ページのカラーページを描くのに丸2日は掛か

る」とある<sup>21)</sup>。この言葉からも谷口のうちに細密さという形での拘泥が存在していることが窺われる。

もう一つ、“静止性”についてだが、谷口の描画は静的である。動的な場面を描いた絵も動きがぎこちなく感じられる。全体的には、漫画というよりも写生画のように見える<sup>注6)</sup>。この“静止性”は描画の細密さに由来しているのだろうが、いずれにしろ、一ヶ所（一つの状態）に留まろうとすることであり、これも拘泥の存在を窺わせる。

とはいえ、細密さへの拘泥や静的事態への親和性が代償に過ぎない以上、それが主体のフィロバティズム心性を真に満足させてくれることはありえない。

谷口について言うならば、彼が40歳頃になって東京近郊に居を構え、知人から犬をもらい、その犬を連れて散歩する日々が始まった。その散歩がきっかけとなり、谷口が自らの心の内に潜む、広がりへの一体化と充足への志向に半ば無意識的ながらも気づき、“散歩もの”漫画を手掛けるようになったことは十分に考えられる。

## おわりに

谷口ジローをフィロバティズムという基底欠損水準に位置づける見方に対しては、疑義が出るかもしれない<sup>注7)</sup>。しかし筆者は、フィロバティズム心性の持ち主、すなわちフィロバットが我々の思っている以上に多いのではないかと推測している。なぜなら、本文で説明したように、少なからぬフィロバットが成長していく中で基底欠損を補うスキルを身に付けるため、大人になった時点で彼らは“普通の人”とほとんど変わらない姿を呈すると考えられるからである。そして、谷口もまた、同様のスキルを身に付けて人生の荒波を乗り切っていたのではないだろうか。

たとえば、谷口は幼少期、病弱で本を読んだり絵を描いたりして過ごしたということだが<sup>6)</sup>、これは空想癖の存在を窺わせる。（ちなみに空想とは、心的な広がりへの志向の一樣態でなかろうか。）また、細部への拘泥も、彼の初

期の絵に早くも認められる<sup>20)</sup>。これらの傾向は、一般の企業や公的機関などの組織の一員として勤めたとき不利に作用するかもしれないが、谷口は繊維会社を2年で辞め、漫画家の道を選択した。この転職が彼の空想癖や拘泥を長所に変えて、最終的に漫画家としての成功へと導いたのだと思われる。

ところで、ここまで進んでくると奇妙な問題に直面させられる。フィロバティズム的關係にあつては、対象（人間）は冷淡なもの、信賴のおけない危険性を秘めたものであると先に述べた。したがって、フィロバットは他者を回避し、他者不在の広がり（もしくは他者が背景としてのみ存在する広がり）を志向することになる。これは自閉に他ならない。加えて、本文で述べたように、フィロバットが拘泥という特徴を示す場合も往々にしてあるだろう。

もしそうならば、フィロバティズムはASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）と相貌が似通ってくる。なぜなら、ASDもまた、自閉（社会性の障害と固執）を主徴としているからである<sup>注8)</sup>。

もちろん、フィロバティズムをASDと同一の障害と見なすには、両者を詳細に比較検討し、整理しなければならない点が多分に残っている。この作業は容易に為しうるものでないが、ASDとフィロバティズムが同じ病態の異なった側面の現われかもしれないという推測は、精神医学的にも興味深い<sup>注9)</sup>。これを主題とした論考は、機会を改めて発表することにする。

（本稿の要旨は第64回日本病跡学会総会（2017年7月：京都市）で発表した。）

## 脚注

- 注1) 図1～7は、著作権法第32条に則って引用した。
- 注2) 二者関係とは、その二人－たとえば母と乳児－の間に父親や共同体のルール、社会的規範など第三者的な存在の影響が及んでいない関係をいう。
- 注3) ここで言う「対象」とは、物質や物体などの「もの」ではなく、「人間」もしくは乳房などの「人間類似の対象」を指している。



- 注4) オクノフィルが発達の過程で二者関係のままに留まるならば、彼は病的な精神状態—たとえば境界例のような重度のパーソナリティ障害などを呈するだろうが、ある段階で第三者的な存在が内在化されていくなれば、彼は定型的な精神分析学的発達を遂げるということになる。
- 注5) ここで言う「もの」とは物質・物体や事柄を指し、「人間」は含まれていない。人間はそれぞれ固有の意思を持ち、フィロバットにとって予期せぬ行動をとるため、拘泥の対象とはなりにくいからである。
- 注6) インタビューの中で、谷口は自分が、メビウス（B・Dの一人でフランス漫画界の巨匠）の影響を受け、「欧州の漫画は静的で一つ一つの絵をじっくり描き込みます。私は欧州の漫画の模写を繰り返したので、無意識にその影響が出ているかもしれません」と語っている<sup>5)</sup>。ただ、筆者が考えるに、B・Dの漫画の影響を受けたというより、谷口自身が緻密さの追求や細部への拘泥を本来的に有していたからこそ、B・Dの漫画に惹かれたのに違いない。
- 注7) 基底欠損の「欠損」はネガティブなイメージが強い。『Basic Fault』の訳者・中井久夫は「Fault」に「欠損」という日本語を充てているが、この訳語をめぐる精神科医の山中康裕は、中井の業績を讃えたエッセイの中で次のように述べている。「ただ、氏には、何の瑕瑾も全く無いかなと言えば、この私にも、一つだけ指摘できることがある、それは、バリントの主著《Basic Fault》を、氏は、《基底欠損》と訳された。私からすれば、この「欠損」という訳はいただけない。なぜなら、欠損とは、「根本的に欠けている」という意味であり、もう補いようがないからだ。テニスのフォルトだって、ルール上、線の外に出ただけであって、ボールが無くなるわけではない。第一、地質学では、これを《断層》と訳している。だから、私は、《基底断層》としたい。「ズ

レている」だけなので、何らかの工夫さえすれば、繋がる可能性の余地があるからである。」<sup>22)</sup>

- 注8) 「拘泥」も「固執」もこだわりという意味では同じ言葉であろう。ただ、論を進める上で混同を避けるために、フィロバティズムには「拘泥」を、ASDには「固執」を充てた。
- 注9) たとえば、筆者は別のところ（参考文献3）で、ASDが自閉（社会性の障害と固執）の濃さ・薄さに応じて現れ方が異なり、さらにその現れ方は社会構造や文化の形態によっても影響を受けるのではないかと論じた。そして、少なくともASDの一部は、1900年前後を境としてそれ以前には「懷郷（郷愁）病」と呼ばれていた可能性を指摘した。同様のことは、フィロバティズムとASDの間においても当てはまるかもしれない。精神分析という学問領域の観点から“フィロバティズム”の病理にみえるものが、発達障害という学問領域の観点からは“ASD”の病理にみえる可能性が考えられないわけではないからである。

## 引用文献

- 1) Balint, M.. The Basic Fault-Therapeutic Aspects of Regression. London: Tavistock Publications, 1968. (中井久夫訳. 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析. 東京: 金剛出版, 1978; pp.25-108.)
- 2) ibid; p.98.
- 3) Balint, M.. Thrills and Regression. Connecticut: International Universities Press, 1959. (中井久夫、滝野 功、森 茂起訳. スリルと退行. 東京: 岩崎学術出版社, 1991; p.167.
- 4) ibid; p.102.
- 5) 毎日新聞. 時代を駆ける 谷口ジロー／1 欧州へ日本の日常漫画. <http://mainichi.jp/articles/20170211/org/00m/070/001000d> (2018年1月15日 閲覧)
- 6) 中条省平. B Dとマンガのあいだで. 瀬



- 尾英男編. 追悼！谷口ジロー. 芸術新潮. 2017;7:120.
- 7) 谷口ジロー. 歩くひと. 東京：光文社, 2010;pp.92-93.
- 8) 谷口ジロー. サスケとジロー. 歩くひと所収. 東京：光文社, 2010;pp.197-209.
- 9) 谷口ジロー. あとがきにかえて 私の散歩. 歩くひと所収. 東京：光文社, 2010;pp.272-273.
- 10) 谷口ジロー. ふらり. 東京：講談社, 2011;表紙, p.93.
- 11) 谷口ジロー. ヴェネツィア. 東京：双葉社, 2016;表紙.
- 12) 谷口ジロー 作画, 久住昌之 原作. 散歩もの. 東京：扶桑社, 2009;表紙.
- 13) ibid;pp.87-100.
- 14) 谷口ジロー 作画, 久住昌之 原作. 孤独のグルメ. 東京：扶桑社, 2000.
- 15) 谷口ジロー 作画, 今泉吉晴 原案. シートン 第1～4章. 東京：双葉社, 2005～2008.
- 16) 谷口ジロー 漫画, 夢枕 獯 原作. 神々の山嶺 上・中・下. 東京：集英社, 2016.
- 17) 谷口ジロー. 東京幻視行. 東京：コミックス. 1999;表紙, 扉絵.
- 18) ibid ;pp.209-211.
- 19) 谷口ジロー, 関川夏央. 海景酒店. 東京：双葉社, 2015;pp.118-119.
- 20) 瀬尾英男編. 追悼！谷口ジロー. 芸術新潮. 2017;7:108-109.
- 21) 東洋経済. 「孤独のグルメ」の作者は“怪物”だった！  
<http://toyokeizai.net/articles/-/60953?page=4> (2018年1月15日閲覧)
- 22) 山中康裕. 中井久夫氏の人と書物のことなど. KAWADE 夢ムック 中井久夫 精神科医と言葉の作法 所収. 東京：河出書房新社, 2017;pp.86-87.
- 23) 夢枕 獯. エヴェレスト 神々の山嶺. 東京：角川文庫, 2015.
- 2) 二木文明. 風景とフィロバティズム. 臨床精神病理 2007;28 (2) :129-134.
- 3) 二木文明. 『懐郷と犯罪 (Heimweh und Verbrechen)』(Jaspers,K.) を読み直す－自閉スペクトラム症の視点から－. 臨床精神病理 2017;38 (2) :151-160.

## 参考文献

- 1) 二木文明. 谷内六郎とフィロバティズム. 日本病跡学雑誌 2002;63:24-32.

## **A study of Jiro Taniguchi's Comics of Walking(Sanpomono) —from the point of view of Philobatism(Balint, M.)—**

Fumiaki FUTAKI, Miho TSUNODA

### Abstract

Jiro Taniguchi drew comics of walking (Sanpomono comics). For example, 「Walking man」, 「A series of walking」, 「Wanderings」, 「Venice」, and so on.

Heroes of Sanpomono comics are supposed to have the mind of Philobatism(the intention to unify with human-absent expanse and feel fulfillment by walking,etc). Similarly, Jiro Taniguchi must have possessed same mind, too.

But, Philobat(possessor of philobatic mind),who is difficult to adapt to human relations or society, survive his life in way of clinging to things or objects.

Jiro Taniguchi also became comic artist, and at the beginning, made minute, literal drawing that suggests adhesion to things or objects. However, by a chance of remove to Tokyo suburb, he must have become conscious of Philobatism that lie behind the inner part of his mind, and put his hand to Sanpomono comics.

**Key word :** Jiro Taniguchi, Sanpomono comics, Philobatism, Adhesion, Balint,M.